

わ生玉を名

四

二九八

お生玉の御事四

第十一 治室の辭古

丈の事牛行徳にじ本を歎き。水中に響くも心は富  
する事を能ぐと三教の序よりるとへらひ。わの富貴  
庄表の極てひよ棟を一つよけろ。湯殿言張が一そ  
まぬ階すとひておもへうかは板石松篠の木も幽すり。  
まもれてみよへるころ被湯殿御を參し壁とさうれ  
書院よしづとやなうれ相あへるかにひすふゆきく  
つぞハれとてうを射波とみどんとさひくせととがる  
義理のあへれり。城、ああさつ小立う。

入うる足す人の人いふあけふれす筆をうべと述べてふ。  
まひたまくまぬうてねじく。あとてをあけめぐとの  
りうがうるわとひく候者一つをやすべ。お下て沐浴  
する事あれ始をう浴津よがとの業にて沐浴の  
祓ひ。祓は祓ハ列達の物也。史祓祓の祓とて  
天種の令れ宣ひ。中呂祓常盤太連の六祓浴津の  
祓。又三種の祓十種の祓をもくわう。心ようもひ祓神を  
もひはる奉神道志流のうとひだつと。公代祓とへやくの  
ごくとくひ。身のよき増するをば湯あらひあは  
りてあり。毛利もひじけ湯をくみてあれば筆を

わらすよ湯風呂あらう壳れ呂あらう巻れ呂あらう金れ呂あらう。皆自  
 分一己うて人の身を清淨よまうじうふ。け湯及ぞうち泡  
 又ハ度要の度よげづくくお風呂様は一ロアで泡あとす  
 そ幸づけの世よモドさう行まれてて始一せん泡とて之を。  
 えい小経納をもつとす母とへ云ひ。湯風呂お風呂  
 写ル風よ空ぬあけ。行燈をこうこそ御形わらうとそ幸  
 ちうじゆく  
 置白清淨なるは更に真言とまゆ。七姫セナヒとまゆ  
 五方ガラス。裏襟えみえを主とするお風呂と。西を清淨にてす  
 湯風呂へ。天地を泥ねの若達りゆをこなす。もとの組合  
 せうる事とひぐ。壁かべとまゆ。非人をおあにし。ハ  
 わらは纏わらはの綿めんよどきを後食ごしょくと同ちあべ。極又湯風呂を  
 いはり  
 下品めりのと誰が云ふれあらや。湯風呂のや本もとが多大。出羽の  
 木よへ湯風呂とくふ風化ふうかあり。阿波瀬あわせのまよふゆ  
 道みちもと。ゆあがまゆあがまの本もとを下づく。つるせます  
 て。おもむりすがくす。今育いくく。ヤキヒキ。幸運。湯のあ  
 まよふゆと。列慈聖れきせいの本もとえ湯の夢ゆめ。アヒタ。大權だいせんの力と  
 う。仰あおは梅うめをこしきて湯風呂宮風引みやふうひくよでる事うにれんと  
 おも。スーく一つ株くらとくす。乃極おごくもと。一色ねれらとて  
 美うつくいを拂ほふよもしくねうんと。今育いく。五所ごしょくをまくをまく  
 ヤキヒキと云すと。戸口とぐちをつしごぬ

才十二 富澤の記

富澤つぐと家を喰ねりてやうるへ湯殿の下なる事  
つづけらるどけある。いう物は家うりど有ては未だ  
取れずす。是より教奉一つ株うち公の事小  
叶ふらう山は別に邊らうすにのみに移ひゆも万  
がり。おし今もけらうとどもいまうとも在ぬ  
ぞ。よもよが一族へ太き一切のくじを一朝因縁  
きとらでけりにがくくござ奉かくべ。まわぐくまえ  
ハ志胎脇のせじる翁也。丈太極とよきてあ供とゆ。  
道幻湯湯とまくとくねく湯湯をそひへす

ソ事がく。西廻入をとて地う。日あ並べ月あう。夜あ並  
星あう。大あ並小あう。またあ並べ續にひく。續あ並んで  
五並う。清津うるねづれど、ア唐ふゆの必接う御す。  
清津うるねづれど、清津とあくびきねす。ア津  
乃あ並み。ヨコにあして清津とあくびきねくる事  
ガく。御志じくうきと音志と等くべき接うけるを。玉茎玉  
がくよきと小并て音志と等くべき接うけるを。玉茎玉  
は人並く少くふあく。土地自強の用うとへき被服  
皆のじく去極のひままでさうり。音義ハツシテト並みて  
玉擣しきぬまこと。ス毅を温くゆハれるもほな。

おもむれ

まはを海邊よりうす。むか歎きて又殺行をりしを  
誓ひさんや。よきから下万民までせ生をほき。ま殺城  
中きあきまば。令れ犯の犯にて令の犯父と云へぐ。ま  
そいやじづきあはくぞ。おゆぢり童女の西林  
みーすみれ名の泣よ辱とつを付て呼ゆあまこと。  
男ふみと付てひきびと紀實之の初名を日教坊の阿古  
原といひ。すまきびう。うがのあやみとまくそもらど。  
又海氏のをひづきとそらとあると名和被れ先  
をめ女をみて涙を垂へ。辱とつをすすめし海原  
あはきや。又ちかのあらをつじ仲写れあ合ふを知



の事處よつてある。和室に湯を。向ふて被菴の様のと用を  
あすけれ大切。うち外農家も家の湯手すりにて御と雪屋  
もお詫わ敷の事。信そ。ほんの用をあすけ切あらゆ  
は筆にうがうて用をあすく云うべから。又多佐の押  
ふ切といつた。茶湯をあすくまではとせばまた庭裏  
を囲ひ。いにしへもう毒は仕事のゆゑひそ湯をかく  
事終よす。あきとばち屋の大切口と呼ぶ。且ち湯  
あすく武者もへ根ね成らしく、威儀をくじけかな  
らしきに湯をあすくは正徳より憤懣禪もどうら  
うて不作ほん方うち振振といふ。湯よ爲入教害小也

卷之二

人たま頃春明月を以て田石灌を家とひまび  
也。三十日不寝をまづの隣うすや何からづくも江  
きりしき以後別ふ造つて車へ言あもすむうか  
とは方乃手のうだる也。いわゆる勝手は才がくと  
う洋ぐの色を才とけせばああくねふきと水神御を  
はまをす。日は小氣う生變更すの毒よらひありや。  
お神の積をもしけが。漸よちやうはえよかよすと  
み方へ枝枝よろびけり。湯多す事無よ近よのまん中  
かれを種す。和漢よろび葉ぐ一つ棟をほ居し  
名とをきる。

才十三 疏ねの葉情

玉牛箱

四ノ六

七或六疊を表ハ秋を以海とゆく博物志に記せり。其に  
海波静めく圓も清る。時津角尾上お生の松枝と  
あふる。げ葉と枝うなぎした。喜食乃延年と譽を  
て。ゆくにあらきねの仲間のうすや食。籽せせぬ。珍  
肴代生産して。げ葉入本と一少。ちうだ若竹と  
は方うちもちせれより紙をつう。それで。たまくのせ食がま  
とて。お神の苦勞をとひと。多くの枝を安てある。  
うく。冬食。一の枝葉よろび。いづきよも。横枝よかく。  
は友石の山壽食ハ酒うけは事。云々。ば。帝。信。本。鑿。

御文庫本

さあまくお第こまごときを審まようべたりも未だ  
神あすは衣被もあればて洗濯もせど事一毛毛程  
月出でれ事あらと。さればつとの事アーハモテラスヒ  
慰アヌレ候事アリ。浦の東邊を第一の池草にて。嘗て  
は海濱草木也。嘗てれ船日ひよく大立を生し。  
岩の根ねが砂石を泥写よるびきる。近にの園うち陽  
志契亭傍の一つ松也。始より泥ものすすましくせざる  
新色也。此樹がこそぞて何更ふうにぬもうす。泥ハゲ  
ガクと雪に一仰よのすれど。がる大窓の泥裏と材のか  
船ノ船は行もや面白くも泥壁と不審ナリ。

獨身書一少は影處の仕切也。少うともへ知えさし。  
いふ所を拓るの有べし。細をつまび。拂らむこと。人食ふ  
弓の矢。一つ松枝ざとつるひ。いづれ長身をあきらめられ  
切るがどうとも見えらる。なまくけり。松枝の  
令合あく。ひきとゆく。樂す。度席も。面も。あへ  
す。とほのじきんと。所も。嘗じてなり。どひ。どひ  
よあひ。びきよ。取引とや。心のうねを拓とて。どひ  
骨もかに仕合す。候。望へ。深ふ。身びどひのどひを  
お別くは。叶ヤシ。桺一つ松を。辛夷。お始く。數々  
一ハ人ヨ三十九代天智天皇也。歴。後數百年

天正九年の天風もあり一時。佐多と松を移し風をあらひ。松  
を吹ふてこよし。すむか今。新松の天風をあきらめ。吹  
例まき。新松新天風をうへ人ひちの松もあら  
枝づくしを植へく。今ふうす。松も多。アラム。松も  
二代目のツ松も。従まひものせし。松も。一  
二代目のツ松も。従まひものせし。松も。

樹木一とて。煙煙そ。植木一とて。

情きぬき。一生をやうぐ。いふをさせし。一  
ぬうのはがい。うそをかげし。人人の顛顛あ  
乃野野。あらね。女ね男ね枝枝をかり。根根をかく。根根の  
形形を取取り。間間は連連根根のねと人人よ。拿拿う。うをうを。

さあに一生をけ。そ。樹木をんのには。く。松松く。人人を  
すこがと。櫻桜。行行あが。見見。村村。辛辛。櫻桜の根根のゑと。写写け。道道は  
八景八景。日日みへらき。嫁嫁。いや。ゆ。いや。ぐくと。ひ。事事。  
は。度度の。安安。舍舍。で。う。て。ハ。心心を。く。す。や。圓圓。く。毛毛を。で。本本  
く。毛毛。く。毛毛。く。毛毛。く。毛毛。く。毛毛。く。毛毛。く。毛毛。く。毛毛。く。毛毛。く。毛毛。  
緑緑も。草草も。入入。す。自自の。獨獨。く。ら。れ。す。ま。ば。う。す。う。一。度度。乃  
真真を。こ。す。し。は。を。く。人人。よ。苦苦。勞勞。を。う。り。事事。か。う。御御。に。同同。

只只。ふ。仕合仕合する。方方。と。を。極極。も。や。だ。く。に。い。と。い。よ。く。お。高高。  
さ。う。風風。早早。ふ。わ。い。ご。く。か。と。耐耐。ハ。ツ。松松。が。洞洞。を。う。う  
と。ま。う。い。け。さ。ぐ。く。ま。て。ナ。ク。る。い。す。と。一。毛毛。う。ま。く。い。れ。と。

必在括は物もとてゆきまじく。はのちりと一本カリと一つねと  
あゆの詰へよ。表せうとも考ふるをれ事也。もとある書  
をあかでそろへに。近は程壁紙を拂ふね一株うち。ねの葉  
一簇のあよ一つねと多く。本草に記ねよニ叶と計ス計の  
葉ありとソリと一計をのせど。むちからいへども。また  
日本考跡考にと。本傳の一ツねハ一本とすの謂あらず。  
はねハ一茎よ葉一つあるがあたりと記す。唐大刀年  
よとが化一つをにまれ候て一つねとせよに喫られ。をに  
ハネの一つよ葉ある。ナはとをケレ仕合え。かくは  
ねの雌雄をもとづき。かくはじいをうかがひ。かくを

名の事。ねの木に。いはく。ねこつみ。したる。す。か。な。事。  
かに。の。く。皆。食。令。の。御。く。し。ふ。う。れ。だ。喜。想。要。里。支。乱  
難。て。必。一。括。う。く。ぐ。ず。勿。傷。け。一。宿。よ。け。く。カ。く。一。松  
ま。ハ。ま。か。日。本。の。ゆ。め。く。名。を。い。よ。す。也。は。中。か。と。看  
す。の。付。て。名。る。き。ね。も。わ。り。西。ア。ト。よ。ま。く。名。と。い。一  
ね。も。あ。た。年。竟。ね。へ。と。か。一。て。大。ち。あ。つ。石。れ。幸。と。ふ  
考。ガ。と。ご。收。よ。す。を。悔。じ。キ。も。五。一。す。壁。く。い。て。括  
記。一。の。岩。北。達。け。ね。へ。れ。官。復。の。事。人。と。枝。葉。れ。幸。ま  
ん。ら。く。ほ。木。の。ま。く。壁。紙。を。も。く。れ。を。活。び。活。ま。れ。名。と。い  
き。く。く。く。く。く。く。く。く。

とひもむかし

の被御松へ御まの中納ゆかりりうちなをきこのみゆゆのうてす。一  
事にぬといふ。こよだに遠ひて天法のゆき井うきい水坂の石  
から熊坂の長範ちやほんが抱元いだへね。月半に温ぬるさむかに深ふかめ  
浅あさの核こを被おるふ人ふちくへ不辛ふせん。候先  
往むらふを若わとせよ。要めぐらとせよ。け方かたぬう事ことよ  
あらばよ。れ事ことふ名なとひくとを譲ゆふ。要めぐらと  
くとを悔くやす。只ただ大金おおかなにませとゆきえ。ゆれど  
ううき一つひとよまきてあとひうは葉はをとれど  
ああしも清きよめのまをまよのせ。一葉ひとはといふよ  
見みはムソムソ。一いつねも理りふく一葉ひとはをひきは  
じともと

三半首

四十一

ふとせまく宿しゆくふねをひまく

あくまうれくあ代あだやゆき

と古歌こかの傳つがをひづく。又また絶ぜつびれの妻めを僅すこかと  
ゆと音おとがうしゆ一つひとつの名なをゆど。太おお音おととみつひつ  
つけ音おととみつひつ。一いつねもどうくよごのひきは  
爾それよりくつづりけとぞ。づきとみづきとぞ

己おのが事こととぞとぞぞゆきゆきある

第十四 蘿蔔の述懐

晋さきの石崇いそよし字あだな季き。傷いた。金谷園きんこくえんにて王諲おうじん潘はん岳たけり。都令  
三千人さんせんじん。山水風景さんすいふうけい。游ゆる。宴うたげ。飲く。酒さけ。詩し。作つく。一  
草事くさごとにととふく。ある武ぶ家け。すけ。經けい養よう。招まね。舞まい。御ご。酒さけ。  
くく。美うつくし。碎さい。乃のまつり。ああざ。小洞こぼら。久く世よ。あ。ね。詠よ。  
書か。吉よし故のこの。招まね。みほ。ま。て。と。を。も。長ながめ。て。て。て。月つき。招まねの  
上うれ。酒さけ。も。流ながう。給くわらひ。仕む人じん。の。輕かるく。身み同ひと。へ。も。よ。う。賜たま。臺だい。

五年箱

尾び張はり太おお根ねと。孫まご。で。き。て。て。漢かん士しき西に門もん。の。瓜うり。し。ら。も。あ。る。く。少すくなく。  
練ねり。る。れ。為ため。を。淮さい。ち。く。げ。る。者もの。も。か。く。六ろく。才さい。品しな。の。人じん  
才さい。を。も。ん。で。ど。ろ。又また。國くに。を。破はじ。す。る。り。遠とほ。か。ら。逃のが。れ。往むか。者もの。  
押お伏ふ。使つか。よ。の。赤あか。夷えい。殺ころ。下くだ。き。海かい。網あみ。/  
大おお根ね。に。對たい。財ざい。寶ぼう。賊ぞく。盜とう。賊ぞく。益ます。入い。て。被は。押お伏ふ。使つか。財ざい。寶ぼう。を。奪だつ。取と。之の。軍ぐん。兵へい。を。有あ。り。也や。  
人じん。目め。廻まわ。り。禮れい。賊ぞく。太おお根ね。欲ほ。欲ほ。奢と。華は。金きん。蘿蔔らは。小こ。蘿蔔らは。高たか。  
大おお根ね。刀と。刀と。本もと。多く。れ。夜よ。盜とう。よ。そ。う。合あ。ま。と。鐵てつ。大おお根ね。効こう。を  
や。も。く。く。追お。拂は。り。一いっ。事こと。兼あわ。好す。往むか。旅りょ。草くさ。よ。記き。一いっ。た。も。よ  
も。だ。く。も。お。遠とほ。き。來き。也や。さ。う。う。而て。て。三。個こ。の。甲こう。胃い。と。も。よ。

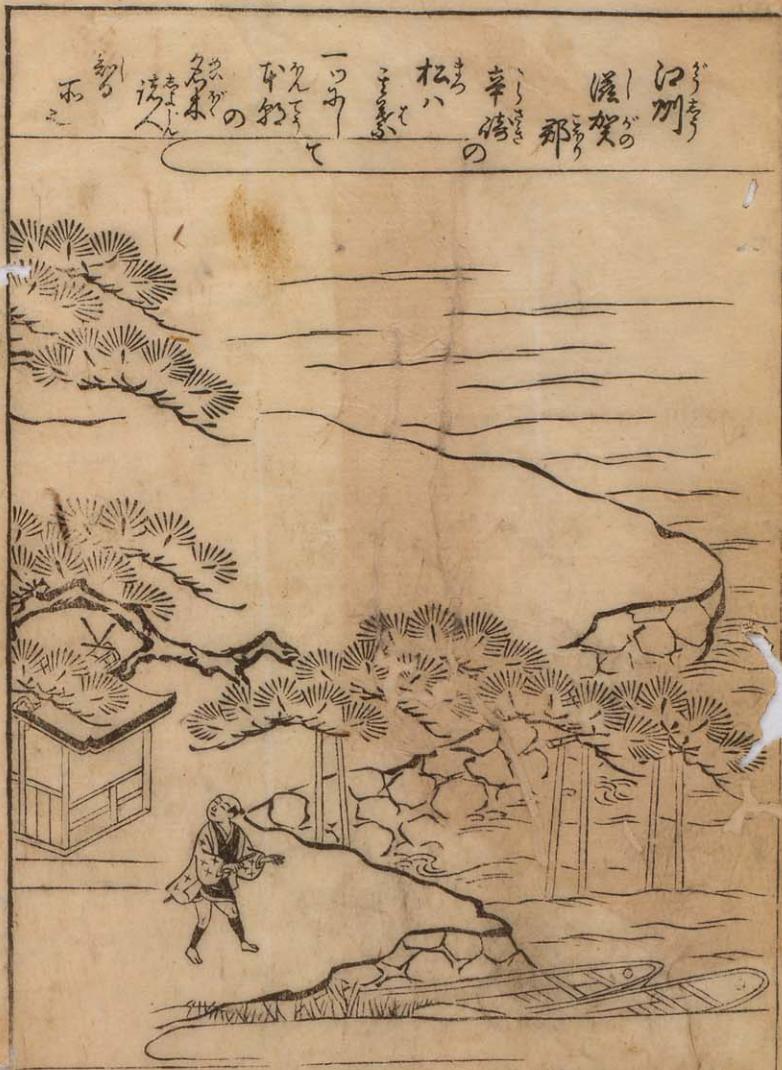
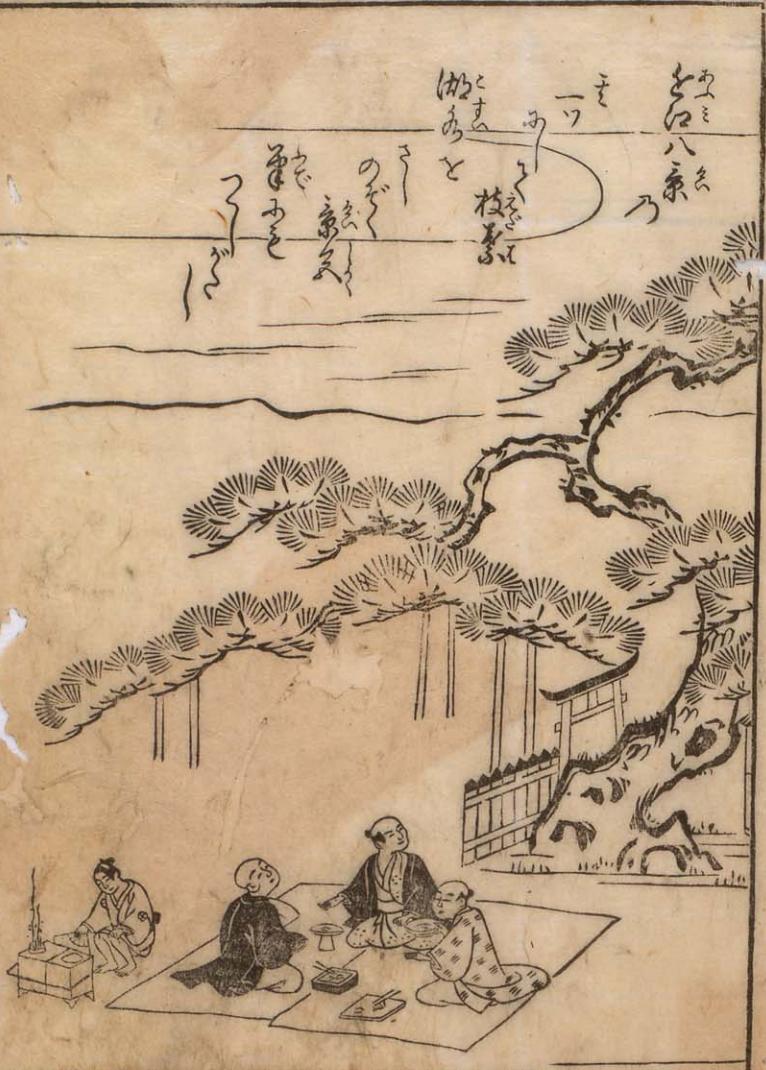
由根のうちて今も着色を失ひ大根もすゝ有事。糸を理  
持ててふきとせん理とゆく諸人のままでからむれば  
うべ。引て風呂敷とゆていはゞ人をしてえらうに頭よ  
はるゝ煙を仰。美村大根をみてへ切目の者の如候  
も少く。大根をみてへ皺半筋を纏ひて見ゆたる葉  
より重合するの牛せうい原又上手にたゞして候る。  
切手しめて其とぞ好まき。花大根とゆてへ事とぞ好む  
る。根をとどき者のかね林とぞいわば根をもぐる事  
なく。湯の内よりひしと人の足とて済りせし。候  
やがく今もまづく。小四乃牛に傳づる今かに

用ひらきは扇虎と。用ひらきは扇虎扇と  
ち便よつて。同じ大根の扇ふうとをしたれども、扇て拂  
うと扇散ざつとも。やまつ和せを含めさうも害え  
食の力と取りうと。扇の扇ふうとを扇の扇ふうと  
アガれとよしくせんと。扇の扇ふうとを扇の扇ふうと  
綿蒲を扇ふうと。扇の扇ふうとを扇の扇ふうと  
をもと松の足を扇ふうと。扇の扇ふうとを扇の扇ふうと  
沖の扇ひのくあきば。又本綿布えの扇ふうとを叶へた。  
木の合ひてくみもく。裏桿の合ひてくみもく  
替へ。要候頃くもへするが。併積でがまく五十年の

爰をうなでかそらとく鳴よ起そくたゞひと皆一続の人間  
ゑそ歌うる足跡の空もどりもかりと事なげきども。  
上あり中あり下あり千萬万列の人名を累。繋があひと  
固あせ。毛角筋くも悔しと云ふ歎めべとぞりとて教ぬ

才十又 梅子れ感懺

生者必滅。食者定誰の様と一ぞとを食を抱かずし  
抱くづる彦さう。硯蓋よ。ぬをうへて。能者の右衛門ハ皆  
ある底の股中に生を人。おのとまへ。梅子れ。つ六つあり  
ちろび。けものねぐつ石く御坐て。己が心より國。ごん心。を  
縁へこうび。うち。ちいど。ヤクスはむの本懐をまよ付



種たねが芽め生うるまで砂いさごの上うへに泥なづくひそや海うみに  
の流ながれとくま一樹いつきの新しん生うすやうも皆みな此生これの縁えんとく。  
海うみの珍ういやく種たねが芽め生うるも一つ破はざるを營くわむとあの方のうの  
まよあきとく。風味かみのよへゆくを賣うりる者ひとあり。がくめぐく  
おのこすれ。有福うふくハ古鬼界うきかいが海うみへ流ながる。成縁せいえん康頤こうい  
八般はん鬼きをもて嘗居ささらせ。汝なは只ただ一人ひとのこゑこゑ。後竟ごくわんがあ  
とふすすまう。と後竟ごくわんがまうと有玉丸ありたまわんがみひじて日時ひときの  
うき紙きをもくせー。が。一向いっこうよ種たねがえ因いんをかくねもくじて日時ひときの  
あれ程いかほどのとぞひやううご。えらき花言はなことせ二ツ弘こう高たかり  
不擇ふばく因果いんげの因縁いんえんす。皆みな後業ごぎょう生うる。六根清淨ろくこんせいじょう

枝も見えぬ。あくび音せてもぞと笑へば人よがり  
を辛<sup>き</sup>落本に生立ゆる花乃見と称す。極中細波ヨ  
名々くらやこのをぞざりとて他處生れいまとす  
も活度<sup>かくど</sup>一時代役<sup>じだいえき</sup>してと云ひ至也和泉アハ  
整形ちよ新陽の梅の名とす。又我生れ極ノ事とは  
足らずとも大變へいじつうんじよ。京夷の家臣が極<sup>き</sup>小  
てとく却。そつと人の肝<sup>こ</sup>と割くうべと奉事<sup>ほうじ</sup>なり。  
とふ太<sup>お</sup>高太自立<sup>じり</sup>天祚<sup>てんしゆ</sup>れに毛本<sup>けいほん</sup>にて免<sup>めん</sup>の配<sup>はい</sup>更  
難<sup>ひず</sup>れ御<sup>ご</sup>をね。極<sup>き</sup>源<sup>げん</sup>を京<sup>き</sup>李<sup>り</sup>ハ生田の森<sup>の</sup>森<sup>の</sup>金<sup>きん</sup>城<sup>じゆ</sup>  
梅花<sup>ばいば</sup>をよりわく名前<sup>なまへ</sup>とす。とくに極<sup>き</sup>

## 玉手箱

今に生<sup>き</sup>てとくも。山<sup>さん</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>じて人<sup>ひと</sup>酒<sup>さけ</sup>し  
あくき。む極<sup>き</sup>の零<sup>れい</sup>擇<sup>めい</sup>今<sup>いま</sup>極<sup>き</sup>の袁<sup>ゑん</sup>毅<sup>いき</sup>よあぐうかる。  
極<sup>き</sup>日<sup>ひ</sup>小<sup>こ</sup>晒<sup>さら</sup>る半<sup>はん</sup>假<sup>うそ</sup>うて恵<sup>めぐみ</sup>と能<sup>のみ</sup>固<sup>かた</sup>は所<sup>ところ</sup>が致<sup>いた</sup>す有  
き。然<sup>ぜ</sup>とば<sup>ば</sup>衰<sup>す</sup>と<sup>と</sup>出<sup>で</sup>と枯<sup>か</sup>風<sup>ふう</sup>と白<sup>しら</sup>川<sup>かわ</sup>の雲<sup>くも</sup>と<sup>と</sup>讀<sup>よ</sup>  
乃<sup>の</sup>生<sup>き</sup>て秀<sup>ひで</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>也<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>讀<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>讀<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>讀<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>。  
極<sup>き</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>讀<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>讀<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>讀<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>。下<sup>くだ</sup>と<sup>と</sup>きて忽<sup>と</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>と<sup>と</sup>讀<sup>よ</sup>  
く<sup>く</sup>。極<sup>き</sup>よ年<sup>とし</sup>きて數<sup>かず</sup>年<sup>とし</sup>にう。壺<sup>つぼ</sup>よほ<sup>ほ</sup>と<sup>と</sup>きて人<sup>ひと</sup>  
用<sup>もち</sup>ひら<sup>ひら</sup>と<sup>と</sup>ハと<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>。只<sup>ただ</sup>人の粥<sup>ゆ</sup>の茶<sup>ちゃ</sup>よするのを<sup>を</sup>。  
今日の<sup>の</sup>破<sup>は</sup>づの仲<sup>なか</sup>入<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>半<sup>はん</sup>竟<sup>きよう</sup>辛<sup>き</sup>華<sup>け</sup>



悔を嘗みりて身をもとめずてよりか一生を終らぬ事で  
ひを男へみゆきと妻を出でて志れ一度滅びて御身。さる  
の裡を無く一生伏し身を九年自立風のくまに  
死生れ身につけづきと一擧て物語うるみぞ。書の  
物とかをしていふ事は極やれゆかほれども。も  
えれども丸く皺のちまる所へを傳の教化よほし。  
身はのう身とそらく世の辛き事を教ぢぬばよハシタ  
そこくふいとぬをして双方へ立とせけり。

ね茎玉子第三之四